

Title	京都大学附属図書館創立80周年記念式典に際して
Author(s)	岡本, 道雄
Citation	静脩 (1979), 16(2): 1-2
Issue Date	1979-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/36849">http://hdl.handle.net/2433/36849</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher



# 静脩

1979年12月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 16, No. 2

## 京都大学附属図書館創立80周年記念式典に際して



京都大学総長 岡 本 道 雄

本学附属図書館は、去る12月11日（火）に創立80周年を迎え、京大会館で記念式典が挙行された。

以下は、式典に際して、岡本道雄総長よりの御挨拶です。

本日、本部附属図書館の創立80周年記念に際し、式典を催しましたところ、文部省の篠沢学術国際局長を始め、近隣諸大学の諸館長、学内教職員多数の御出席を得ましたことは心から私の慶びとするところであります。

只今林館長から申されましたように、本学図書館は、本邦第二番目の大学図書館として明治32年12月11日開館を開始したものでありまして、本学初代木下総長が東京帝国大学教授として図書館管理をかねていた関係上特に本学図書館の創設に対しては、ひとり大学の用のみでなく我が国、西部全体の用に供すべしとの意気込みで立ち向ったものであります。

従ってその後の発展も著しく歴代館長もまたそれぞれ人を得てそれぞれの時代の碩学を迎え、当

初56,555冊の蔵書は4年後36年には40万冊、50周年には100万冊、60周年昭和36年には200万冊、70周年昭和46年には300万冊、現在370万冊を蔵し、この間80年、京都大学における研究者の研究、学生諸君の学習を支え輝かしい成果を挙げて来たことは御承知のとおりであります。この間の文部省を始め関係各位歴代の館長、館員の皆様の御努力に対して、この機会に私から敬意と感謝を捧げるものであります。

当初は単一な大学図書館として出発したわけですが、京都大学の発展に伴い全学の図書活動は漸次各部局ごとの図書館分館活動を伴い、今や極めて大規模な図書館群の活動となっています。これと同時に本附属図書館は学習図書館的なものとして利用されることが多く研究図書館としての機能は部局図書館に移行する傾向はありますが、しかし附属図書館は全京都大学の図書館活動に対して常にその道標として要として機能してきているものであります。この学習図書館としての機能としても年間35万という膨大な学生数を思う時、本図書館において如何に多くの京都大学の学生が勉学につとめたかを思いますとその果している役割の大であることを思うのであります。

しかしこの部局図書館の研究的利用の増大はややすると教官の附属図書館への全学的関心を薄れさせる傾向を招致していることは、注意を要す

るところであります。と申しますのは今や図書館は単に書を蔵するところではなくて広く情報を媒介する機関として図書館機能を果すものであり、このためには強力な中心なくしては各部局の図書館も機能を果たし得ません。さきに発表された日本学術審議会の学術情報システムの在り方についての中間答申にもありますように大学図書館はひとりその大学内において機能するのみでなく、広く学外においても相互に手をたずさえて我が国の学術情報の提供に責任を持つべきものであります。その意味では、京都大学が一丸となって外へ手をさしのべることが必要であり、そのためにはまず学内での調和ある全図書館群の融合が必要です。各部局、各研究者の独自性を尊重しつつ広く京都大学の図書館のトータルなシステムを組むということであります。そのような図書館の機能的変革の秋に当り、本学図書館全体として、この附属図書館に期待すべきところは甚だ大であります。

さきにこのような本学における学術情報問題、殊に機械処理について調査検討をすすめるために学術情報問題調査検討委員会を設けましたのも、このことのために全学的な関心と工夫を喚起する意図に外なりません。何卒かかる委員会の検討を土台として、学内でのネットワークや学外との提携をすすめ図書館活動を通じて京都大学の負う責任を果すことを期待しています。

最後に建物について一言しますと、図書館は学

生諸君のためにも又研究者のためにもその大学の学問的雰囲気を中心として、彼らを研究学習に誘うものでなくてはなりません。読書に疲れその屋上に上ってはそのキャンパスを眺め、その学問的雰囲気にひたり又夕方、又は深夜図書館を後にして帰途につく時、本当に学問をする者の喜びを味わしめるのも学生時代の学問雰囲気の満ちた図書館であります。この点、私が本学に入ってから以来、本学は必ずしも恵まれているとはいえないのであって、昭和11年失火にあいその後15年地鎮祭を行いつつ今次大戦に遭遇し中途のまま放置され、昭和23年戦後窮乏の尚収まらぬ時、ひとまず完成といった経過を辿ったものであって、そのため外観内容共に学問的雰囲気といった様相を持っていません。かつて若い頃留学してみた世界の大学の図書館のたたずまい、又過日英国、仏国を辿ってみた現在の図書館の実態と比較しますとこれはまさに本学の一つの大きい不備といわねばなりません。この点各方面の御検討と御工夫を願っているところではありますが、何卒一日も早く新しい附属図書館が建設されることを希うものでありまして関係各位の御理解をお願い申し上げます。かくて名実共に京都大学の研究、学習の原動力として今後共に本学の附属図書館が益々発展し来たる100周年には名実共に本学の学問研究の中核と成っていることを信じ、そのための学内外の御協力をお願いして挨拶と致します。

## 式 辞

京都大学附属図書館長 林 良 平



本日、京都大学附属図書館の創立80周年の日を迎えるにあたりまして、ここにささやかな記念の式を上げることのできますことは、わたくしどもの心から

喜びとすところであります。学内外の多数の来賓関係者がこのように御参会頂きましたことは、重ね重ね喜びとすところであります。皆様の御厚情に厚く御礼申し上げます。

この機会にわれわれの80年の歩みの一端をふり返り今日おかれています状況について御報告申し上げ、ここに致しますまでの御努力御協力に殊に